



地域で生活継続のために訪問看護師としてできることはなにか

匿名希望

訪

問看護師として、都心部を訪問エリアとしている訪問看護ステーションに勤務していたが、機会があり、郊外のステーションで訪問看護に従事させてもらうようになり、半年が経った。

在宅療養をしていると、主治医の処方などですべての医材料や衛生材料が手に入るわけではなく、ちょっとした便利用品などを自分で購入する必要がある。

たとえば、口腔ケア用の歯ブラシ、処置に用いると便利な不織布、フィルム剤、HCD、処方の適応まではいかないけれど栄養補給剤など。

大病院が林立し、門前薬局をはじめ大手のドラッグストアがひしめく都心部を訪問エリアとしていたときには気づかなかったことだが、それらを高齢の介護者が手に入れることは、郊外においてはかなり難しいことだった。

まず、情報がない。手に入れる手段がない。ネットでの買い物は息子や娘でもない限りほとんど不可能である。そして最近よくあるケースは、日常の食料品さえ買い物に困る買い物難民状態である。

働き盛りのころ、郊外の閑静な住

宅地に家を建てたはいいけれど、人口減で歩いて行ける範囲の商店は閉鎖。バスは廃止。大型スーパーは遠いし運転免許は返上。仕方がないから、一大決心をしてカートを引いて買い物に行くしかない。

子どもたちに頼んだり、生協などの配達を利用するなどの代替の方法は、「商品を自分で見て買う」ということができず、私には想像もできなかったのだが、やはり買い物のクオリティとしてはかなり落ちるらしい。

大阪にしてこの状態であるから、地方都市の方はどうしているんだろうと思ってしまう。

いまどきは、介護する方だって高齢者なのだけれど、同居の家族がいるともちろん家事支援は介護保険では利用できない。要介護者の身体介護をお願いしている間に、介護者が買い物に行くというのは、介護保険の性質からして適応してもよいのだろうかという疑問に思ったりして、私も提案できていない。

フレイルとまではいかないけれど、交通手段や情報、体力において弱い立場にある高齢者が楽しく元気に暮らせる地域づくりをしないと、質の高い生活というのは実現しないのではないかと。

まして、目の離せない要介護者を抱えた高齢介護者や、子どもが遠方にいる場合などはどう生活を継続していけばいいのだろう。いろいろなことをあきらめないと、自宅では暮らせないということなのだろうか。

要介護者が施設や病院にいてくれれば、高齢の介護者も何とか地域で暮らしていけるのだけれど……という構図では、在宅療養を選択しにくい。

私はこれまで、医療の面から在宅での療養実現に頭をひねり、提案を続けてきた。

しかし、町全体が買い物にも便利で、息抜きのできる喫茶店が歩いていける距離にあったり、介護浸けの人々が気軽に話ができる場所があるという便利さをもたなければ、そこで生活していくことができなくなるのだと感じた。

そういったニーズに応える事業が求められているのではないかと。ただ要介護者を預かり、面倒をみてくれる施設が増えるだけでは、要介護者も介護者も毎日の暮らしそのものが楽しくないのではないかなあと感じた半年だった。

ささやかで当たり前の希望、例えば正月前には神棚をきれいにしたい、孫にやるお年玉を新札に両替したい(制度的には日常生活支援から逸脱するため介護保険は利用できない)、自分で手にとって買い物したい(環境的に難しい)などが叶いやすい地域づくり、しくみづくりに何が障壁かが少しはわかる人、訪問看護師として関わりたいと思う。人々に、死に場所としての地域でなく、死ぬまで生きる場所としての地域が選ばれますように。

あなたの「声」をお待ちしています。

編集室より

掲載記事に対する感想／著者への手紙／編集室への意見・提案／看護に対するエッセイ／取り上げてほしいテーマなど、何でもOK。読者同士の情報・意見交換の場にしたいと思います。

●投稿について

封書、ハガキ、FAX、メールにて下記までお送りください。実名掲載が基本となりますが、匿名の場合はその旨明記ください。掲載分には医学書院特製図書カードを進呈します。

●宛先

郵送の場合：〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23

医学書院「訪問看護と介護」編集室

FAXの場合：03-5804-0485 E-mailの場合：houmon@igaku-shoin.co.jp